様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　3 月　31 日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７６０４８９
研究課題名（和文）　東アジアにおける文化遺産のオーセンティシティに関する比較研究

研究課題名（英文）　COMPARATIVE STUDY ON AUTHENTICITY OF CULTURAL HERITAGE IN EAST ASIA

研究代表者
清水　重敦（SHIMIZU SHIGEATSU）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・文化遺産部・主任研究員
研究者番号：４０３２１６２４

研究成果の概要：
本研究は、東アジアにおける不動産文化遺産のオーセンティシティ（真実性）概念を比較して論ずるものであり、日本、中国、韓国の３国につき、概念の史的形成過程から、その共通点と差異の抽出を試みている。中国に関しては、平成 18 年、20 年に現地での情報収集と建造物保存、遺跡復元の現場視察をおこない、韓国に関しては、各年度において、特に 20 世紀前半における文化遺産保存の考え方と実践のありようを日本との比較の観点から分析し、同時に現在進行中の建造物保存、遺跡復元プロジェクトにつき、担当者からの聞き取りと意見交換をおこなった。日本については、概念形成の基礎をなす明治から昭和初期における文化遺産保存の理念、方法、実践を、研究代表者の既往研究を補足するかたちで実施した。以上の作業を経て、東アジアに共通するオーセンティシティ概念につき、「更新のオーセンティシティ」という考え方を提出するとともに、中国においては「原状(Historic Condition)」の概念、韓国においては構造補強と材料交換の関係、日本においては復原と構造強化の分節的同時併存、という観点において、明確な差異がみられることを明らかにし、それぞれの成果を研究論文、図書、口頭発表として報告した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成１８年度	1,200,000	0	1,200,000
平成１９年度	800,000	0	800,000
平成２０年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	240,000	3,040,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠
キーワード：オーセンティシティ、文化遺産、東アジア、保存・修復、遺跡復元

１．研究開始当初の背景

本研究は、東アジアの視野に立った文化遺産保存修復の理念と方法の構築へ向け、東アジア各国･地域における保存･修復を、歴史、制度、体制、修復事業、理論の各側面から総合的に比較する研究構想の一環として実施するものである。日本や韓国によるアジア諸国への文化遺産保存国際協力が増加しつつある昨今、国際的な視野に立ち自国の文化遺産保存修復の特質を明確に論

理付けることが急務となっている。この両国を含めた東アジア各国における保存修復の理念と方法は、木造を中心とする文化遺産の共通性や、文化財保護政策をめぐる歴史的経緯により、相互に関連性を有しており、一貫した視点で議論されるべき段階に来ていると考え、この研究を構想するに至った。

２．研究の目的

本研究は、東アジアの視野に立った文化遺産保存修復の理念と方法の構築へ向け、東アジア各国･地域における保存･修復を、歴史、制度、体制、修復事業、理論の各側面から総合的に比較する研究構想の一環として実施するもので、建造物、遺跡といった不動産文化遺産のオーセンティシティ（真実性）概念に的を絞る。東アジアにおけるオーセンティシティ概念は、1994 年の奈良会議が出発点であるため、直接の議論の蓄積は多くないが、各国におけるオーセンティシティのありようは、その国の保存修復の歴史と方法に刻み込まれているはずである。よって、各国の文化遺産の保存・修復史を、オーセンティシティに注意して再読し、各国におけるあり方を相互比較した上で、東アジア共通の特性と、各国の文化的背景に基づく差異とを読み解いていきたい。

３．研究の方法

本課題では、日本の他、中国と韓国を比較の対象として取り上げる。

(1)日本におけるオーセンティシティ概念

日本におけるオーセンティシティ概念を客観的に示すため、建造物及び遺跡の保存・修理・整備につき、歴史的視点から考察をおこない、その始点を見極めることで特性をあぶり出す。また、戦前期韓国の状況との関連性を読み込むことで、日本のあり方を再考する。

(2)中国・韓国におけるオーセンティシティ概念

以下の３つの方法で現地調査をおこない、日本と比較しつつオーセンティシティの考え方を探る。

①過去の文化遺産保存修復理念に関する研究論文の収集

②中国国家文物局、中国文物研究所、韓国文化財庁、韓国国立文化財研究所等の行政官、研究者へのインタビュー及びディスカッション

③現在進行中の重要な修復工事、遺跡復元工事の現地視察、関連資料の収集、担当者へのインタビュー及びディスカッション

(3)東アジアにおけるオーセンティシティ概念の抽出

日中韓３国における文化遺産の保存・修理の歴史と方法の関連性及び比較考察をおこない、東アジアに共通するオーセンティシティ概念の特質と、各国の差異を抽出する。

４．研究成果

本研究の成果は、論文としてのまとまりのつくものより順次公表した。以下、「研究の方法」に記した順に成果を記す。

(1)日本におけるオーセンティシティ概念

本研究では、日中韓三国におけるオーセンティシティに関わる考え方の差異を、その形成期における欧米との関係の持ち方により生じたものと推定し、まずは各国における近代の保存修復の形成期を追うことにつとめた。日本については、概念形成の基礎をなす明治から昭和初期における文化遺産保存の理念、方法、実践を、研究代表者の既往研究を補足するかたちで実施した。具体的には、日本の建造物修理事業の黎明期に中心的役割を担った伊東忠太、関野貞、松室重光の事績を中心として日本の建造物修理に関わる理念を抽出する成果をまとめた。

まず、京都における初期古社寺保存事業の社会的意義を、京都府最初の監督技師松室重光の活動をたどることを通して考える論考を執筆した。ここでは、松室が、奈良県技師関野貞に一歩遅れて古社寺保存の分野に参入したものの、この分野に対する特異な思考態度を持っていたことを明らかにした。すなわち、彼は古社寺の建造物を、境内空間及び都市の風致としてとらえており、新築設計から古社寺修理に至るまで一貫した建築観を有していたこと、そしてその核となる概念である「保存的都市改造」が、明治 30 年代における京都の都市計画理論に並行するものであったことである。日本における建造物修復の歴史の劈頭を飾る人物の業績を再考することで、保存修復の歴史に一つの核となる視点を提示し得たものと考えている。また、関野貞に関する小論もまとめ、『関野貞日記』（中央公論美術出版、2009）に掲載した。

次いで、同じく日本の建造物修理事業の黎明期を国の技師の立場で担った伊東忠太に関連する論考を２本執筆した。１本は、古社寺保存会草創期に作成された１枚の古社寺建造物等級表の意味を解明する論考で、これが伊東忠太により古社寺保存会の行政資料として作成された、建築家による最初の建造物等級表であることを示し、そしてその作成背景をなす伊東が明治 20 年代末に実施した建造物調査に言及することで、特別保護建造物認定制度の形成過程と伊東の役割を明らかにした。もう１本は、明治 25 年から 30 年

にかけての伊東忠太の建造物保存に関連する活動を、伊東忠太の手紙から追い、その特質を明らかにしたものである。伊東は対象とする建築群とその保存を、「古社寺建造物保存」でも「古代建築保存」でもなく、「日本建築保存」と規定し続けた。それは、建築学としての視点に裏付けられたものであることを示しており、それゆえに、保存が、過去の建築物に同時代的価値を見いだすための方法として意味づけられることへとつながった。伊東が最初に設定したこの枠組みが、古社寺保存法以降の建造物修理のあり方に水面下で深い影響を残すことになったものと考えた。

以上の建造物保存の歴史に関する成果に加え、現在の建造物修理への連続性、そこにおけるオーセンティシティの問題、そして遺跡復元におけるオーセンティシティの問題につき、『建築大百科事典』にて論考を執筆した。

(2)中国・韓国におけるオーセンティシティ概念

中国に関しては、平成 18 年、20 年に現地での情報収集と建造物保存、遺跡復元の現場視察をおこない、韓国に関しては、各年度において、特に 20 世紀前半における文化遺産保存の考え方と実践のありようを日本との比較の観点から分析し、同時に現在進行中の建造物保存、遺跡復元プロジェクトにつき、担当者からの聞き取りと意見交換をおこない、オーセンティシティの問題を考えた。

韓国については、日本文化庁及び韓国文化財庁が主催する日韓文化財建造物保存協力協議会という機会に相乗りし、「日韓における文化財建造物保存の興隆と展開」と題する公開講演会を企画し、日韓の研究者による講演をコーディネートした。また、自らも「技術者の系譜からみた日韓の初期文化財建造物修理技術」を報告し、講演レジュメとして論文を執筆した。韓国の建造物保存修理は、日本支配時代とそれ以降とで断絶があるとされており、その状況を客観化するためにも、日本側の視点から日本支配期の建造物修理について考察しておく必要があると考えたもので、韓国の研究者による研究成果と重ね合わせることで、より深い理解が可能となったものと考えている。

そして、20 世紀前半における日韓の建造物保存修復を、修理方針、技術者、修理技術から比較する論文をまとめ、日韓両国語にて発表した。本論文は保存修復の歴史に関する論文ではあるが、東アジア各国における建造物のオーセンティシティに関する微細ながら本質的な差異として、建造物の屋根構造が規定する修復方法が、オーセンティシティ概念をも拘束する面があることを抽出している。すなわち、日本の場合、平安時代以降に野小屋が発生するとともに、天井が積極的に張られていくことで、見えがかりと見え隠れという対概念が発達していく一方で、韓国においては(中国でも同様であるが)野小屋という概念はなく、しかも化粧屋根裏の建物が多く、基本的にはほとんどの部位が見えがかりとなるため、修理における補強材の挿入の考え方が大きく異なってくるのである。この違いゆえに、日本支配期の韓国においておこなわれた建造物修理において、韓国の建造物の特質を意識的であれ無意識的であれ、喪失させる修理がおこなわれてしまうこととなったし、戦後の建造物修理の考え方の根本が我彼で大きく異なっていったことも推察された。日韓両国語での論文発表の機会を得たことで、今後の情報収集に新たな展開が生じることが期待される。

中国については、保存修復の根本概念として、「原状(historic condition)」という概念を独自に定義して使用していることがわかり、その概念の起点が 20 世紀前半にあることが判明した。この点については、日中韓の比較の観点から、論考を準備している。

また、中国では 2000 年に作成された「中国文物古跡保護準則」において、遺跡復元を基本的に否定し、禁じる規定がなされた。この作成経緯と運用の実態については、今後の課題としたい。

(3)東アジアにおけるオーセンティシティ概念の抽出

日中韓における文化遺産の保護に関する基本理念の研究を通じ、東アジアの木造文化圏におけるオーセンティシティ概念の根本として、「更新のオーセンティシティ」という考え方を軸に据えることを提案した。オーセンティシティ概念は、元来は、材料であれ意匠であれ技術であれ、それらをいかに変えずに保つか、ということを前提に組み立てられている。しかし、木造文化圏であり、かつ多雨多湿の東アジアにおいては、否応なしにモノは更新され、変わっていく。東アジア各国には文化遺産の保護手法に個々に特徴があることが確認されたけれども、実は補強や取り替えなどの方法に差異があるのであって、いずれの国においてもいかに部分を更新しながら価値を保っていくのか、という点に心を配っていることは共通している。そもそも更新を前提にしなければ、東アジアの文化遺産のオーセンティシティは、概念をなさないのではないか、という提案をおこない、本研究のまとめとした。

今後の課題としては、オーセンティシティ概念につき残された課題を詰めるとともに、それを世界史的視野で比較研究すること、そして、遺跡や建造物の保護を、保護そのもの

の中に閉じ込めるのでなく、学術研究の方法として再定位することを考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①清水重敦「松室重光と古社寺保存」『日本建築学会計画系論文集』613 号、2007 年、219-225 頁、査読有
②清水重敦「日韓における建造物保存修理の黎明」『日韓文化財論集　Ⅰ（奈良文化財研究所学報　第 77 冊）』2008 年、349-362 頁、査読無
③清水重敦「古社寺保存会草創期に作成された建造物等級表について」『日本建築学会計画系論文集』631 号、2008 年、2011-2016 頁、査読有
④清水重敦「伊東忠太と『日本建築』保存」『明治聖徳記念学会紀要』復刊45号、2008年、145-164頁、査読有

〔学会発表〕（計３件）
①清水重敦「技術者の系譜からみた日韓の初期文化財建造物修理技術」日韓文化財建造物保存協力協議会公開講演会「日韓における文化財建造物保存の興隆と展開」、奈良文化財研究所、2006 年
②清水重敦「朝鮮総督府建造物修理事業史研究のアクチュアリティー」朝鮮史研究会、仏教大学、2008 年
③清水重敦「更新のオーセンティシティ-木造建築におけるオリジナル」国際研究集会「“オリジナル”の行方-文化財アーカイブ構築のために」東京文化財研究所、2008 年

〔図書〕（計１件）

①長澤泰 ・神田順 ・大野秀敏 ・坂本雄三 ・松村秀一 ・藤井恵介 編、清水重敦他執筆『建築大百科事典』朝倉書店、2008 年

６．研究組織
(1)研究代表者
清水　重敦（SHIMIZU SHIGEATSU）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・文化遺産部・主任研究員
研究者番号：４０３２１６２４